

**事**務局から本欄への寄稿を求められて、改めて思った。「シニアコラム」などというものを書かせていただく歳になったのだと、自分ではまだ若いつもりでいても、周りはそう見てくれない。電車で座席を譲られて初めてそれに気がついたという話をよく聞かすが、筆者も最近自分の歳を自覚する出来事を経験した。

あることを説明するのに磁気テープを引き合いに出したのだが、なかなか相手に分かってもらえない。おかしいと思ったら、そもそもその人は磁気テープを見たことがなかったのだ。それもそのはず、世の中から磁気テープが姿を消してかなりの年月が経つ。磁気テープを見たことのない世代も少なくないわけだ。昔はコンピュータ（電子計算機と呼んでいたが）と言えば、いつもその背後で多数の磁気テープがぐるぐると回っているのが常識だった。筆者世代の常識はもはや通じなくなったのだと、そのとき痛感した。

本会に歴史特別委員会という委員会がある。委員は先輩の方が多いので、磁気テープはもちろん、それよりもずっと以前に姿を消した入出力装置のこともよくご存じである。時としてそれらに話題が及ぶことがある。カードの束を持ち運ぶときに床に落としてバラバラにしてしまったとか、紙テープの切れたのを修復するのが得意だったとか、当時の経験談にしばしば花が咲く。昔話は楽しいが、それが当委員会の目的でないことはもちろんだ。歴史書の出版をはじめとして、日本のコンピュータの歴史を後世に伝えるためのさまざまな活動を展開するのが使命である。

筆者が歴史特別委員会の委員となったのは学会創立40周年のときだった。記念行事の1つとして開催した歴史的コンピュータの展示会の実行委員長を仰せつかったことが、筆者が歴史に関心を持つようになったきっかけだ。我が国で最初のコンピュータが作られてからすでに半世紀以上が経過し、当時のことを知る人は少なくなりつつある。機器の保存や開発の記録を急がなければ、日本のコンピュータの

**旭 寛治** Hiroharu ASAHII

(株)日立製作所

[正会員] asahi@fw.ipsj.or.jp

(株)日立製作所基本ソフトウェア本部長、ストレージソリューション本部長、(株)日立テクニカルコミュニケーションズ代表取締役等を歴任。1999年本会理事、2005年副会長。歴史特別委員会委員、コンピュータ博物館実行小委員会主査。本会フェロー。

歴史は失われてしまう。そういう危機感が歴史特別委員会の活動の基になっている。

10年ほど前に歴史特別委員会の企画で会誌に「日本の情報処理技術の足跡」という連載をしたのだが、編集委員会で、貴重なページを歴史に割くのは会員のためにならないからやめてほしいという意見が出たことがある。会誌は過去のことではなく将来に役立つ記事を掲載するべきだということであった。

果たして歴史は役に立たないのだろうか。本会のWebサイト「コンピュータ博物館」には月に10万件ものアクセスがあるが、これは歴史に興味を持つ人が多く、それが役に立っていることの表れと言えるのではないだろうか。

応  
般

[シニアコラム]

IT 好き放題



[No.30]

## 歴史活動は役に立たないか？

委員会に出席するために化学会館を訪れると、日本化学会のフロアに貼られている「温故知新」のポスターが目に入る。古い物事を調べることによって新しい知見が得られる。論語のこの言葉は歴史の意義を端的に表現している。科学技術の世界にもこれは当てはまる。化学会に限らず電気学会や機械学会等、本会よりも古い学会は歴史活動を重視しているところが多い。欧米はさらに熱心だ。

先日、思わぬところで歴史の知識が役に立った。筆者は知財裁判の専門委員の仕事をしているが、そこでの話である。特許性の判断においては、その特許が出願された時点の技術水準がどうであったかが問われる。ある裁判で、かなり昔の情報技術の実態を専門委員として説明した結果、一件落着となった。

こういうこともないではないが、やはり何と言っても歴史が役に立つのは教育の場であろう。以前本会では実物のコンピュータを保存、展示する博物館の設立を提言した。その提言書の中でも工学教育において歴史的な装置の果たす役割の大きいことが述べられている。

今後も役に立つ歴史活動を目指してやっていきたいと思う。

(2013年4月15日受付)